

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「テーマパーク国家」ブータン
(変わるネパールと変わらぬネパール：
グローバル化した世界に暮らす, 第6回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5095



パロのゾン [碧兼僧院] 脇でツェチュ舞踊の練習中。(2004年)

みなみ・まきと 1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著『エスノ・サイエンス』（京大出版会 2002年）、「文化の生産」（ドモス出版 1999年）、「アジア読本ネパール」（河出書房新社 1997年）など。

変わるネパールと変わらぬネパール

グローバル化した世界に暮らす

さる三月末、はじめてブータンに行ってきた。ブータンは一九七三年まで外国人観光客を受け入れず、今もなお近代化を選択的に導入する政策をとって、自国の文化の継承に腐心する王国である。そのため旅行は、規定どおり現地旅行会社社に一日二四〇米ドルを払うと、ガイド、移動、宿泊、食事が手配され、解禁された地域の希望の場所を周る形をとる。地理的な意味での「秘境」が地球上から消滅した現在、ここは数少ない政治的に作られた秘境なのだ。

文化継承の徹底ぶりは、パロ空港におり立った時から感じられた。公共の建物ばかりか民家までが、伝統的なブータン様式で統一され、人びとの多くは柄こそ違いが同じ仕立ての民族衣装を着ている。街も田園も整然としており、南アジアの混沌・雑然とした世界とは程遠い。折しも季節は桃が咲き誇る初春であり、桃源郷とはかくやと思わせる。

だが一方で、この妙にでき過ぎた環境に戸惑いも覚えた。それは「テーマパーク」で感じる虚構性と、その裏返しメルヘンともいえる。ブータンはいわば、おとぎの国なのだ。おとぎの国に陰影は付きものだ。はたしてブータンも、国王が

第6回

国立民族学博物館助教授
写真文 南真木人

属するドゥクパ人文化を国家レベルで貫徹するため、異民族を同化させ、挙句には排除せざるを得なかった。

一九九〇年に発生し、いまだ解決をみないブータン難民問題がそれだ。市民権法の意図的な改定により、多くのネパール系ブータン人が「非・国民」とされ、大挙して国外に流出。その多くはネパールに避難し、難民キャンプに身を寄せた。国連難民高等弁務官事務所によると、キャンプに住む難民の数は十万四千人（二〇〇四年）に上る。

他方でブータンには、国内に留まることができたネパール系ブータン人が約二十万人（全人口約六十万）暮らす。今回の旅の目的は、彼らがいかに暮らしているのかを調べることであった。だが、私は一人目のインタビューでその難しさを思い知らされた。あるネパール系ブータン人教師が生唾を飲み込み、「政治的な話をしたら私の首がとぶ」と、口を閉ざしたからだ。私は彼の深い眼差しに二の句がつけなかった。研究者の中には、ブータンを実験国家として高く評価する人もいる。だが国民は「テーマパーク」の社員なのだろうか？ そこにはメルヘンの破綻という、深い罅りが見てとれた。

「テーマパーク国家」ブータン